

マタイ 5:27-37 「律法主義の限界」

「あなたがたも聞いているとおり、「姦淫するな」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯しているのである。もし、右の目があなたをつまづかせるのなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。

「妻を離縁する者は、離縁状を渡せ」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。不法な結婚でもないのに妻を離縁する者はだれでも、その女に姦通の罪を犯させることになる。離縁された女を妻にする者も、姦通の罪を犯すことになる。

また、あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、「偽りの誓いを立てるな。主に対して誓ったことは、必ず果たせ」と命じられている。しかし、わたしは言っておく。一切誓いを立ててはならない。天にかけて誓ってはならない。そこは神の玉座である。地にかけて誓ってはならない。そこは神の足台である。エルサレムにかけて誓ってはならない。そこは大王の都である。また、あなたの頭にかけて誓ってはならない。髪の毛一本すら、あなたは白くも黒くもできないからである。あなたがたは、「然り、然り」「否、否」と言いなさい。それ以上のことは、悪い者から出るのである」

主イエスキリストの十字架。それは、人間の絶望が、最後の最後に行き着くところに、立っております。

主イエスキリストの十字架。それは、人間というものの悲しみの最も深いところ、人間の経験のもっとも低いところに、立っております。

今日お読みした主イエスキリストの言葉は、そのいずれについても、わたしたちが、自分というものに対する望みを絶つようと、促しているところの言葉であります。

そのような意味で、今日お読みした主イエスキリストの言葉は、わたしたちを、十字架の立っている場所へと、引き寄せようするところの言葉であります。

すなわち、人間の絶望が最後の最後に行き着くところ。人間の悲しみの最も深いところ。人間の経験の最も低いところ。そこに立っている、主イエスキリストの十字架へ、わたしたちを招いている言葉であります。

主イエスキリストは、わたしたちが今日読んだマタイ伝の言葉を、特にパリサイ派の律法学者たちを意識しながら、述べられたのであります。マタイ 5 章から 7 章に収められている、山上の垂訓の全体は、「自分で自分を救え」というパリサイ派の宗教に対する、強烈な批判となっております。

このパリサイ派の律法学者たちが奉じる宗教というものは、いったい自分というものに、焦点が置かれているところの宗教であります。

すなわち、自分が神に受け入れられ、自分が神から愛でいただくためには、どうしたらよいのだろうか。この、自分から出発するところの宗教。これがパリサイ派の宗教であります。

自分が神に受け入れられるために、どうすればよいのか。このために、パリサイ派の律法学者は、行動の指針となるマニュアルを、聖書に基づいて定めておりました。

このマニュアルに従って行動することによって、自分は神に受け入れてもらうことができる。重要なのは、マニュアルに従って、外形的な標準を満たして、生きていくことである。

第一のマニュアルは、姦淫しなければよい、ということであります。

第二のマニュアルは、離婚したければ正式な離婚手続きにのっとってすればよい、ということであります。

第三のマニュアルは、誓ったことは必ず果たせ、ということであります。

自分が、正しい注意と、正しい努力によって、正しい自分を保つ。姦淫しない。離婚するときは正式な手続きをとる。誓ったことは果たす。このようにして、正しい自分を保っていれば、自分は必ず、神に受け入れられる。

このような宗教であります。そこには、いつも、たえず、つねに、自分の正しさ、自分の力、自分自身、それらによりたのむことが行なわれております。

ところが、主イエスキリストは、このような、自分によりたのむ宗教というものを、徹底的に批判なさるのです。

マタイ 5:28 で、主イエスキリストは、このようにおっしゃいます。

「しかし、わたしは言うておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」

外側の行ないが、いかに正しいように見えても、心の中が汚れているならば、おまえは汚れているのだ。そのようなおまえが、どうして神に受け入れられよう。受け入れられるはずがない。

そうして、救われたいなら、自分で自分の目を、くじりだしてみろ、と主イエスは挑発なさるのです。

しかし、いったい、自分で自分の目を、くじりだすことのできる者など、いるだろうか。

主イエスは、ここで、わたしたちが、自分自身の罪深さについて、真に絶望するようにと、わたしたちを追い込もうとしておられるのです。

マタイ 5:32 で、主イエスは、たとい正式な手続きによって離婚したとしても、おまえは間違っている。おまえのその心根そのものが間違っているからだ。おまえの間違いは、手続きの正しさによって、覆い隠されるものではない。おま

えたちの正しさなど、無意味である。そう主イエスキリストは、わたしたちを挑発なさいます。

マタイ 5:34-36 で、主イエスは、自分で自分の髪の毛一本を白くも黒くもできない、小さな人間であるおまえが、どうして「自分は必ず出来る」「必ずなしとげて見せる」「自分は大丈夫だ」などと、大言壮語できるのか。おまえはただの人間であって、神ではない。おまえに何ができるのか。そう主イエスキリストは、わたしたちを挑発なさいます。

主イエスは、パリサイ派の律法学者たちに向かって、おっしゃいましたが、それはまた、わたしたちに向けても語られているところの言葉であります。

その言葉は、わたしたちのうちに、困惑を引き起こすか、あるいは、わたしたちのうちに、自分自身への絶望を引き起こすか、どちらかでありましょう。

外側の行ないが、いかに正しいように見えても、心の中が汚れているならば、おまえは汚れているのだ。そのようなおまえが、どうして神に受け入れられよう。受け入れられるはずがない。

おまえの心根の間違ひは、外面的な手続きの正しさによって、覆い隠されるようなものではない。おまえたちが持ち出して来るような正しさは、すべて無意味である。

自分で自分の髪の毛一本を白くも黒くもできない、小さな人間であるおまえが、どうして「自分は必ず出来る」「必ずなしとげて見せる」「自分は大丈夫だ」などと、大言壮語できるのか。おまえはただの人間であって、神ではない。おまえに何ができるのか。

このような主イエスの言葉は、わたしたちの心を深く傷つけます。そうして、わたしたちは、自分自身に対する絶望へと、導かれてまいります。そうして、その絶望の先に、広い地平が開けていて、そこに、主イエスキリストの十字架が立っているのであります。

主イエスキリストの十字架。それは、人間の絶望が、最後の最後に行き着くところに、立っております。

主イエスキリストの十字架。それは、人間というものの悲しみの最も深いところ、人間の経験のもっとも低いところに、立っております。

今日わたしたちがお読みしましたマタイ伝における主イエスキリストの言葉。その言葉のいずれもが、わたしたちが、自分というものに対する望みを絶つようにと、促している言葉でありました。

その言葉が、わたしたちを、十字架へと招き寄せております。

わたしたちが、自分というものの限界に直面したときに、その場所で、十字架につけられたまいし主イエスキリストに、ほんとうに出会うのです。

わたしたちが、自分自身というものにほんとうに絶望した時に、その場所で、十字架につけられたまいし主イエスキリストに、ほんとうに出会うのです。

自分で自分を救うことが出来ない。そのことがほんとうにわかったときに、福音を福音として、喜びをもって聞くことが出来るようにされているのです。

その福音とは、このような福音であります。ローマ 3:21-26 をお読みいたします。

「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエスキリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリストイエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。それは、今まで人が犯した罪を見逃して、神の義をお示しになるためです。こ

のように神は忍耐してこられたが、今この時に義を示されたのは、御自分が正しい方であることを明らかにし、イエスを信じる者を義となさるためです」

わたしたちは、どうしたらよいのでしょうか。

外側の行ないが、いかに正しいように見えても、心の中が汚れているならば、おまえは汚れているのだ。そのようなおまえが、どうして神に受け入れられよう。受け入れられるはずがない。

だから、おまえのために、わたしは十字架にかかったのだ。そう主はおっしゃいます。

おまえの心根の間違ひは、外面的な手続きの正しさによって、覆い隠されるようなものではない。おまえたちが持ち出して来るような正しさは、すべて無意味である。

だから、おまえのために、わたしは十字架にかかったのだ。そう主はおっしゃいます。

自分で自分の髪の毛一本を白くも黒くもできない、小さな人間であるおまえが、どうして「自分は必ず出来る」「必ずなしとげて見せる」「自分は大丈夫だ」などと、大言壮語できるのか。おまえはただの人間であって、神ではない。おまえに何が出来るのか。

だから、神であるわたしが、おまえのために十字架にかかったのだ。そう主はおっしゃいます。

今日、わたしたちは、自分によりたのむ、ということを終わらせられる地点へと、導かれて来ております。

わたしたちは今日、福音を福音として聞くことのできる地点へと、導かれて来ております。その福音は、このように告げております。ローマ 4:24-25 をお読

みいたします。

『彼は義と認められた』という言葉は、わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」

福音は、さらにこのように告げております。ローマ 5:6-9 をお読みいたします。

「実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです」

人間の絶望が最後の最後に行き着くところ。人間の悲しみの最も深いところ。人間の経験の最も低いところ。そこに両手をひろげて、主イエスキリストの十字架が立っております。

わたしたちは、この十字架のもとに、来ているでしょうか。わたしたちは、この十字架を、見上げているでありますでしょうか。わたしたちは、この十字架の上から語りかけられるところの声を、いま、ここで、聞いているでありますでしょうか。それは、このような声であります。

「子よ、あなたの罪は赦された。わたしに従って来なさい」

願わくは、今日、わたしたちが、福音を、ほんとうの福音として、喜びをもって聞くことができますように。

お祈りいたしましょう。

祈り

天の御父。まことに、主イエスキリストのお言葉は、厳しくわたしたちを責め、わたしたちの心に刺さります。そのようにして、わたしたちは、自分に絶望するようにと、追い込まれてまいります。そのようにして、わたしたちは、ほんとうに主イエスキリストと出会うべく、導かれてまいります。そのことを、心から感謝いたします。

どうか今日、わたしたちが、自分自身という空しい偶像によりたのむところの偽りの宗教から解き放たれて、主イエスキリストの十字架の立っている広々とした地平に立つことができますように。そこから、すべてが始まります。そこから、新しい世界が始まります。そこから、新しい命が始まります。

そこで、両手をひろげて、わたしたちを待っていたもうところの、主イエスキリストのお言葉を、わたしたちがほんとうに聞くことができますように。

「わたしが、おまえのために十字架にかかった。おまえの罪は、赦された。わたしに従って来なさい」

この主イエスキリストのお言葉を、わたしたちひとりひとりが、今日、主イエスキリストご自身から、聞くことができますように。

そうして、どうか「はい、主よ、あなたに従ってまいります」という、ひとりひとりの応答をなすことができますように。

どうか今日という日が、わたしたちがほんとうに福音にあずかるところの、喜びの日となることができますように、心からお願いいたします。

主イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。

アーメン。